

佛教大学

仏教文化研究所報

第 3 号

昭和62年 3 月31日
発行

目 次

・ 仏教研究の国際化にあたって	坪井俊映	1
・ 阿毘達磨大毘婆沙論の一特相	樹田善夫	2
・ 中論の研究— <i>dre satya</i> —	前川重綱	4
・ 補陀落渡海のコースとその問題点	妹尾匡海	6
・ 『仏国曆象編』に就いて	佐藤友通	8
・ <i>Balavatana</i> について	南 清隆	10
・ 『釈浄土群疑論』における不可解な る文章の解明	村上真瑞	11
・ 廬山の慧遠と東林寺	稲岡誓純	12
・ 事業報告	編集後記	13
・ <i>Saundarananda</i> 第2章における特 定動詞語形群の変換	東 直澄	22
・ 仏教認識論による経済の根拠概念の 分析(1)	勝木太一	24

仏教研究の国際化にあたって

坪 井 俊 映

いまさら仏教研究の国際化について論ずることは「古草履をはく」観がないでもないが、近年航空機のめざましい発達によって、人間の大量輸送を可能にし、かつては船旅十数日を要したアメリカ渡航も、現在では十時間余りで行くことができ、アメリカは太平洋のかたにある遠い国ではなく、半日足らずで行くことのできる隣人の国になってしまった。中国、韓国等の東洋の近隣の国々はいうに及ばず、ヨーロッパの諸国も十数時間で行くことのできる隣国となった。かつて京都より九州鹿児島へ行くには夜行列車で十数時間かかったと同じ時間で、アメリカやヨーロッパに出掛けることができる時代になった。

したがって、諸外国へ渡航する日本人も多く、また外国人にして日本に研究留学等のために来られる人も多く、これらの人々と交友を深める機会が増加して、好むと好まざるとにかかわらず国際人としての自覚を持たねばならない時代になって来た。政治経済の面においても同様であって、現在では独り経済的に豊かな大国としての存在は許されなくなり、世界の諸国、諸民族とともにある国際日本を意識せざるを得ない時代となり、来るべき二十一世紀の日本は国際日本の時代といえましよう。

国際交流を深めるに最も障害をなすものは、いうまでもなく言葉の問題である。世界の各民族はそれぞれ個々の言語を有し、この言語をより修得し、その社会状況、国状をよく理解することなくしては、十分な国際交流は不可能でないかと思う。

私がかつてヨーロッパへ旅行したときのことである。ある書店で一冊の本を講入しようとして、拙い英語ながら値段を聞いたところ、私のブローケン英語は先方に通じようであるが、その返事がさっぱりわからない。イエスという言葉はわかったが、

あととはただ早口でワァワァと聞えるだけである。身振り手振りでやっと目的を達することができたが、日本人の発音する英語とイギリス人、アメリカ人のいう言葉(英語)とは声の出し方が異なっているのか、全然耳に入らない。ヒヤリングを怠った自分が恥しくなったことがある。

現在、わが仏教文化研究所が中心となって行なっている日韓、日台の仏教学術研究会も、幸いにも韓国、台湾の学者達が、いずれも日本語に堪能な方であるから研究交流を深めることができるが、それ以外の人となると、中国語、韓国語に堪能な人の乏しい研究所の現状では学術交流のワクを広げることのできないうらみがあり、まして英語圏の仏教学者との交流となるとなおさらのことである。中国語、韓国語は隣国の言葉であり、英語は現在では、世界共通語のごとき観を呈し、世界各国でひらかれている国際学会では開催国の母国語と英語とが主として用いられているようである。

日本の英語教育は中学校から正規の学科としてとりあげられているが、書物のリーディングが中心であるために、文章は読むことができても、話すことが十分できず、ある人のごときは日本人は語学に不適當な民族でないかと酷評する人もあると聞く、これは凡らく耳学問、ヒヤリングを軽視した英語教育の生んだ結果でないかと思う。

現在は上述したように、地球は大変狭くなり、数時間にして諸外国へ行くことのできる国際時代となった。好むと好まざるとにかかわらず諸外国人と接する機会が増加している時代である。仏教研究においても同様であって、研究資料が豊富であり、且つ多くの仏教学者を容れる日本への研究留学が年々増加し、なかには日本仏教の研究を志す人も少なくない。したがって、英、中、韓の三ヶ国語をマスターするに越したことはないが、少なくともこれら三ヶ国語の中の、いずれかの一ヶ国語を十分に修得して、リーディングはいうに及ばず、十分なるカンパセーション能力をもつことが、二十一世紀の仏教研究者にとって必要なことでないかと思う。